



総務部・福利厚生二課

〜男たちの楽園〜

楓花の疑似レズプレイ

長門秀虎

楓花の疑似レズプレイ

大手企業といわれる総合商社、クレシータ。

成長という名にふさわしく、躍進やっしんを続けるこの会社には秘密の部署がある。

総務部・福利厚生二課。

通称、男たちの楽園（オアシス）と呼ばれているその部署は、楽園の名にふさわしく、今日もクレシータの男性社員をもてなしていることだろう。

『福利厚生男性用チケット』

- ・二回目以降の利用について。
- ・二回目以降の利用はウェブサイトから予約がおすすめです。

- ・以下のQRコードを読み取りし、社員番号を入力。
- ・予約一覧より予約後、福利厚生二課までお越しく下さい。』

毎月、給料明細と共にランダムに配布されるA4サイズ紙。一見何の変哲もないただの紙切れに見えるこれを、クレシータに勤めるほとんどの男性社員が心待ちにしている。皆がこの紙を一枚でも多く手に入れようと、日々切磋琢磨し、この紙を奪い合うように努力する。

その結果がクレシータの成長に繋がっているのだ。

もちろん、二週間ほど前に配布されたチケットを綺麗に折りたたみ、すつとジャケットの内ポケットにしまった、加藤かとう文正ふみまさも例外ではなかった。

加藤がクレシータに入社したのは一年半ほど前になる。

前の会社にいた時、世話になっていた先輩が先にクレシータへと転職した。その先輩

に誘われたのだ。

後悔はさせない、と。

その時はまだ、秘密の部署の存在は知らされていなかった。

それから一年半。声をかけてくれた先輩には、本当に感謝をしている。給料も申し分ない上に、クレシータには加藤にとって今や必要不可欠であり、仕事のモチベーションを飛躍的に高めてくれる部署があるからだ。

妻子を持つ身でありながらも、一般的ではない性癖を持つ加藤にとって、総務部・福利厚生二課の存在は、それだけでクレシータに転職して良かったと心底思わせてくれる価値があった。

「加藤部長。営業二課からお電話です」

「ああ、はいはい」

部下に言われて、点滅している電話の受話器を持ち上げる。

加藤の仕事は、商品の売り込みだ。配属されている部署は営業部。中途採用ではある

が、加藤は営業部の一課から三課をまとめる営業部長である。

こうやって電話に出ている時や仕事をしている時には、おそらく誰も気が付いていないだろう。

加藤に女装癖があり、女の格好で女に犯されたいなどという、特殊な性癖を持っているということに。

妙な性癖に目覚めたのは、妻と出会う前だった。

とある風俗店に友人と共に行った時、相手をしてくれた風俗嬢が言ったのだ。『女みたいにされたいって人もいるんだよ』と。

ちよつとした雑談だったと思う。初めて会った客を和ませようとしていたのかもしれない。彼女は、『いろんな性癖を持つ人間がいるから、お店の中ではルール違反にならない限り何でも言ってみてくれていい』と笑いながら話しかけてきた。

彼女の言葉を聞いた時、加藤は漠然と『男なのに頭がおかしいんじゃないか』と思った。それまでの加藤に人生の中で、男は普通やりたい側の人間、リードしたい人間だと

信じて疑わなかったからだ。

『変わった人もいるんだな』と言った加藤に、彼女は『一度、試してみる？』と言ってきた。

ほんの気の迷い。

ただのおふざけのつもりで、彼女に言われるままに加藤はベッドに寝転んだ。その店にあった、男性が着るための女装用のコスプレ衣装を身に纏って。

その時感じた得も言われぬ感覚が忘れられなくなった。

女物の服を身に着け、軽く拘束され、自由を奪われる。それは、加藤がその年まで男として生きてきた中で、一度も味わったことのない感覚だった。

女を抱いている時とは違って、誰かの手に翻弄される。身を任せ、ただ快楽に溺れるというだけではない。してはいけない格好をしている。なんて情けないのだろうと思うのに、その情けなさで恥ずかしさが生み出す高揚感に憑りつかれた。

それから何年も先まで、加藤の奥底に秘めた感情を植え付けるくらいに、新鮮で魅力

的なものだった。

「わかった。月末にまた成績を提出してくれ。ああ、じゃあ」

野太い声を出し、手に持っていた受話器を置く。「休憩に行ってくる」と部署のメンバーに声をかけて、ロッカールームへと立ち寄った。

専用のロッカーから、事前に準備しておいたポストンバックを取り出して、トイレへと向かう。

狭い個室の中で、スーツのジャケットとシャツ、着ていたものを順番に手早く脱いで、取り出した下着を身に着ける。男物の肌着の代わりに着用したのは、透けてしまいそうなほど薄い生地レースがあしらわれた女が乳房を覆うもの。ブラジャーだ。

その上からYシャツを着て、今度はストラックスを下ろした。

ボクサータイプの下着を脱いで、ブラジャーと揃いの可愛いショーツを穿いている。社内のトイレで、女性物の下着に着替えている。それ自体に、すでに期待と興奮をあらわにした加藤の雄は、面積の小さいショーツからはみ出し、他人に見られたら笑わ

れるだろうと思うほど滑稽な状態になっていた。

「はぁ……、っ……」

熱を持ち首をもたげる雄を、無理やりにストラックスの中に押し込めて、もともと穿いていた下着をポストンバッグの中に詰め込んだ。

個室から出て、鏡の前に立つ加藤の姿は、どこからどう見ても男らしい風貌だ。スーツの下に女性もの下着を身に着けているとは、間違っても思われはしないだろう。

ジェルで固めた黒い短髪は、ツンツンととがっているし、がっちりとした体軀はまるで体育教師のようだ。

けれども、個室で下着を身に着けたことによる高揚が、加藤の頬を染めていた。鏡の中には惚けた顔の男が映っている。

(行くか)

手洗いの水で軽く顔を洗い流し、パンパンと頬を叩いてたるんだ表情筋に気合を入れろと合図する。